

国際シンポジウム「生物多様性条約

- 世界と日本を結ぶ国家戦略をめざして」報告（概要）

1月27日（土）に国際シンポジウム「生物多様性条約 - 世界と日本を結ぶ国家戦略をめざして」（IUCN-J 主催）を開催しました。政府省庁関係者・NGO・企業メディア・学生・研究者など幅広い分野から総勢 227 名のご参加を頂きました。

日本委員会では、9月から3回にわたり勉強会を積み重ね、その集大成ともいえる会議となりました。生物多様性条約事務局長であるアーメッド・ジョグラフィ氏と IUCN 主席研究員であるジェフ・マクニリー氏を招待し、基調講演をして頂きました。

また、パネルディスカッションでは、生物多様性の保全に影響力を持つ各セクターのリーダーにお集まりいただき、活発な議論を行いました。

以下、その様子をご紹介します。

当日配布資料は、PDF でダウンロードできます。

<http://www.iucn.jp/Event/IUCNsympo.html>

基調講演（10：15-11：00）

「2010年目標の達成と日本の役割」

アーメッド・ジョグラフィ 生物多様性条約事務局長



- ・生物多様性条約は「命の条約」と呼ばれており、偉大な条約と思っています。
- ・温暖化防止と比べ、生物多様性の問題は、世界でも意識が低い中、シンポジウムを含め日本の方の意識の高さをうれしく思います。
- ・ミレニアム生態系評価（MA: Millennium Ecosystem Assessment）という報告書を、地球の生物多様性を国際的に議論する上での、共通認識としていますが、非常に危機的状況にあることを教えてくれています。たとえば、地球の森林の割合はごく最近まで 47%とされていました。ところが、現在 25 カ国におきまして、森林生態系が完全に消滅してしまいました。29 カ国においては、森林の 90%が消滅しています。国連食糧農業機関（FAO）によると毎年 1300 万ヘクタールの森林が失われているそうです。これはベルギーの国土面積の 4 倍です。
- ・このような危機的状況に取り組むために国家間で約束された「2010年目標」を達成するためには、各国が国家戦略を打ちたて取り組む必要がありますが、現実にはなかなか策定が進んでいません。日本が準備している国家戦略 2 度目の改定というのは世界でも進んだ事例であり、その教訓を世界にアピールすると共に、生物多様性条約（CBD）が進める「2010年目標」を視野に入れた国家戦略の改定を行ってほしいと思います。

- ・ 2008 年開催予定の CoP 9 は、ドイツのボンで開催されますが、ドイツは G8(2007 年)の議長国として、G8 史上初めて「生物多様性」を議題にあげます。2008 年に議長国となる日本もこの流れに続いて「生物多様性」を人類にとって重要なものとして考えてください。
- ・ 先月の国連の会合で、2010 年を「国連生物多様性年」とすることが決まりました。2010 年の CoP10 はきわめて重要なプロセスで、日本を初め政府・地域社会・NGO・企業といった多くのセクターの参加が重要であり、それを促進するリーダーとして日本にがんばってもらいたいと思います。

基調講演 (11:00-11:45)

「生物多様性条約に関する国際社会の経験 ~日本が世界に学べること」

ジェフリー・マクニーリー IUCN 主席研究員

- ・ 生物多様性条約は、自然と自然の関係だけではなく、人と自然の関係、すなわち文化も扱う条約です。
- ・ MA のコンセプトというのが重要です。生物多様性とそれがもたらす生態系サービス(人間への利益)から捉えたことが重要な点であり、文化的サービスも含まれます。MA では、生きものだけでなく、人類の幸福のために「安全・安心感」「福祉のための基本物資」「健康」「良好な社会との関係」「選択の自由」の 5 つの項目を重視しています。
- ・ 生態系サービスを貨幣換算で考えることも一つの方法を教えてください。1 ha あたりのマングローブの木材としての価値は 1 年間に 90 ドルで、エビ養殖場にすれば 2000 ドルの価値になります。しかし、生態系サービスという価値を見ると、マングローブは小魚の生息地としての価値(60 ドル)、海岸線の防護(4000 ドル)の利益を持つのに対し、養殖所は補助金(1700 ドル)が使われ、海洋汚染による損失(230 ドル)があり、復元のためにも莫大な費用がかかる(8240 ドル)ことを考えると、エビ養殖場への転換は 5000 ドル近くのコストになるのです。マングローブの利益(社会への利益)とエビ養殖場の利益(個人への利益)の違いが重要なのでしょうか。
- ・ 都市緑地・河川・低地森林・草原・山岳すべてのランドスケープが生態系サービスを提供しており、すべてのランドスケープを保全し、考慮するというランドスケープの考え方も重要です。平等・配分の問題もあります。戦後、食糧生産が拡大し、一人当たり食料もふえましたが、栄養不良状態の人口は 8 億人以上存在しているのです。



以上のような点を踏まえ、日本の国家戦略改善に向けた論点を 10 項目挙げたいと思います。

1.生物多様性の科学的基盤を強化する

2.生物多様性を支える経済的手法を拡大する

生物多様性を危機的状況にする方向に公共投資が行われていないか検証することが重要でしょう。また、生態系サービスへの支払いという思想が今後重要になりますし、生態系オフセット・水源税・炭素取引というものがすでに動きつつあります。

3.民間企業の生物多様性保全への参加をうながす

ある石油企業は、すべての事業地域で、事業計画と共に生物多様性行動計画を作成しています。企業に対する適切な情報提供がカギとなると思います。

4.農林水産業に生物多様性保全を組み込む

IUCN では、エコアグリカルチャーの研究をし、食糧安全保障と生物多様性のグッドプラクティスをまとめました。

5.CBD と他の条約やプログラムとの連携を図る

特に重要な存在が世界貿易機関 (WTO) です。日本は WTO と CBD の協力、科学技術分野の生物多様性研究の発展などに必ず貢献できると思います。

6.情報の流れをすみやかにする

自由な情報へのアクセスに向けたプロジェクトとして、コンサベーション・コモンズというプロジェクトに IUCN は深く関わっています。

7.バイオセイフティーに関するカルタヘナ議定書を支援する

8.CBD 第 8 条 h 項 (侵略的外来種) を実行する

外来種が影響を与える業種の広さを十分に踏まえる必要があります。

9.CBD の保護地域作業プログラム (PoW) を支援する

10.消費者の生物多様性保全に配慮した産物への要望を高める

・今のままでは「2010 年目標」の達成は難しいかもしれませんが、2010 年に新しい目標が生まれることでしょう。日本の戦略がその次の目標にインスピレーションを与えることを期待しています

<質疑応答> 11:45-12:10



Q オフセットの評価を科学的に行うことは可能でしょうか？

A オープンな形で、入手可能な科学的知見で行わなければなりません。ベターな選択として取ることは可能だと思います。(マクニーリー)

Q グローバリゼーションは消費の拡大をもたらしたが、これに対して CBD としての戦略・プログラムがありますか？

A 流通の問題と公平性の問題、責任の問題を議論することが必要だと考えています。日常への波及という視点も重要です。CBD 事務局は小さく、予算もわずかです。そのため CBD だけではなく、締約国とその国民、IUCN のようなパートナーが協力することによってはじめて可能になるでしょう。また、ODA や技術支援などさまざまな方法を通じて、生物多様性を国際議論の俎上(アジェンダ)に載せることも重視しています。(ジョグラフ)

Q CBD としての役割、IUCN としての役割も聞かせてください。

A IUCN は 80 年から議論を始め、いろいろな機関がまとまり始めたことを考えると、IUCN が CBD の基礎を作りました。IUCN は CBD の母親そのものです。現代は、IUCN に加え、新しいパートナーシップ(世銀や地域開発銀行、新しい分野の省庁)を構築していきたいと思います。(ジョグラフ)

A CBD は政府間の組織ですが、IUCN は政府と NGO との連合体です。締約国を通じて影響を持つと同時に、市民社会に対して CBD のサポートにおいて関わるといった違いがあります。(マクニーリー)

Q IUCN のような機関に、温暖化防止条約における「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)」のような枠組みを CBD の中で担ってもらうことについてどう考えますか？

A すばらしい考えです。IUCN のキャパシティーは類を見ないもので、市民社会も巻き込める力を持っていると思っています。モントリオールの(生物多様性条約の)事務局と世界を結ぶ架け橋として IUCN が必要だと思います。事務局は、基本は政府のために働く組織なのですが、市民社会に向けても行動力を持ちたいと思います。フランスのシラク大統領が、IPCC のような環境ガバナンスを提案されています。(ジョグラフ)

A IUCN としては、ぜひ IPCC のような機能を果たしたいと思っています。IPCC は政府の合意から生まれましたが、政府の意思決定が重要です。(マクニーリー)

A IUCN に正式にアドバイザーになってほしいことを表明します。(ジョグラフ)

報告（13：35 - 14：00）

「日本の生物多様性国家戦略」

環境省大臣官房審議官 黒田大三郎



1次戦略、2次戦略を通じて前進をしてきました。2次戦略以降は、遺伝子組換えの規制に関する法律、自然再生法、外来生物法などが生まれました。棚田や里山の保護など文化財保護法の改正もありました。しかしまだまだ生物多様性の危機はさっておらず、更なる行動が必要だという指摘を頂いています。

現在、見直しのための懇談会を環境省内で行っています。今後も中央環境審議会で半年かけて議論していきたいと思ひますし、説明会・意見交換会といった地方会合を積み重ねていきたいと思ひます。

（私見ですが）重要な点を挙げてみると、2010年目標の位置づけ、気候変動への対応、モニタリング、保護地域や湿地・川を使ったネットワークづくり、海洋については基礎情報の収集が重要でしょう。漁業や観光と生物多様性の保全との関係も全体として取り組むことが求められているでしょう。人が支える里山と活動する人の関係づくりが重要です。

生物多様性に関する指標を設け、目標を定めることが重要です。一番大胆なアイデアですが、そのためにグローバル・バイオダイバーシティ・アウトルック（GBO）の日本版（JBO）も考えてよいと思ひます。

自治体やNGO、企業の参加も重要です。地方版戦略を促進することも考えていきたいと思ひます。また、民間企業については、いわゆるCSRのみならず、本業の中で生物多様性保全に貢献してもらえるような指針・ガイドラインを提案することも重要だと思ひます。

今後、国際社会で「生物多様性」は大きな流れになりますし、していきたいと思ひます。よりよい国家戦略にしていきたいと思ひますのでぜひ応援してください。

パネルディスカッション（14：05～16：10）
「世界と日本を結ぶ国家戦略をめざして」

パネリスト ジェフリー・マクニーリー、
堂本暁子（千葉県知事）、黒田大三郎、岩
槻邦男（兵庫県立人と自然の博物館館長）、
大久保尚武（日本経団連自然保護協議会
会長）、草刈秀紀（WWF ジャパン自然保護
室次長）



コーディネーター 吉田正人（IUCN-J 副会長・日本自然保護協会理事）

各発表者要旨は、特設ページをご覧ください。 <http://www.iucn.jp/Event/IUCNsympo.html>

都市環境の問題も重要。現在、世界人口の半分 51%が都市部に住んでいるが、都市化が急速に進んでいる。

国家戦略に「技術の未来」という側面を盛り込んでほしい。19世紀は化学の世紀で、20世紀は物理学の世紀で、危険と汚染をもたらしました。21世紀は生物学の世紀で、持続可能性を実現するツールになると思う。生物から日々の生活に活かしたものを生み出すバイオミミクリーが重要だろう。

里山というチャレンジはよい。農業補助金の一部を伝統的農業形態の維持に振り向けてみてはどうか？

海洋保護システムを拡大して、公海上に広げるということが必要。日本のリーダーシップはとても期待されている。

生物多様性をエネルギーとつなげることが重要。エネルギーは今後のもっとも大きな課題となる。生物多様性がエネルギー解決のために重要なことだということをメッセージとすることがよい。

千葉県に続き、愛知県も県の戦略を作る予定となっている。町田市での試みもある。よい意味で競争してほしいし、国にも提案してほしい。

締約国会議に向けて地球規模生物多様性情報機構(GBIF)との連携、生物多様性センターの能力向上をしていきたい。レッドリストの作成を通じて大きなネットワークが生まれているが、更なる拡大が重要。

博物館に期待。来館を待つという受身ではなく、積極的に知識を広げ、ネットワークを広げる基地になると思う。





MA の報告書について専門家でも全部を読んだ人はいない。中身を分かりやすくし、共有することが大事。MA が資金の問題で、次のステージに行けていない。評価サイクルの確立をめざした支援が必要ではないか。

都道府県などで、MA に対応する調査のメカニズムを作れると大変よい

実施のための目標・指針。共通認識できる指針をつくれないうるか

JBO について。国家戦略の全体の効果を図ることが必要で、GBO の枠は参考になる。日本はデータがあるので、GBO をうまく日本として解釈していきたい。指標やターゲット・目標の整理から始まるだろう。

三番瀬では、生物多様性にむけた合意形成がスタートした。コミュニティの再生が重要で、ローカルナレッジの検討が必要。

日本では漁業資源（乱獲）の歴史をどう受け止めるか議論できていない。海洋保護区については、厳格な保護（Strict reserve）と資源管理・利用管理の地域（management area）の二種がある。知床の世界遺産を使って、後者の成功モデルを作りたい。

建築による残土、農業による化学物質汚染などまだまだ問題は山積みとなっている。河川や里山の循環的営みを戻し、保全することが重要。

自然保護と経済との調和というのは難しいが、街づくりや流域管理、コンクリートのあり方など地域づくりの計画に生物多様性の視点を入れることが重要。その際、シビルエンジニアリングという部分で企業が果たせる役割は大きい。

バイオミクリーの研究は日本でも盛んで「自然に学ぶものづくり」というコンセプトで注目されている。「技術シーズ（アイデアの源）」は自然にあると思っている。

開発と自然保護の関係と共に貧困と自然保護の関係も重要。貧困のなかで自然をどう守り、生計を立てるかというのは世界的な問題となっている。



以上
シンポジウムにご協力・ご参加くださった皆様、ありがとうございました。

文責 道家哲平
無断転載禁止